HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	阿部, 剛史; 山田, 久恵
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 46
Issue Date	2023-07-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95633
Type	book
File Information	MuseumNews_46.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ISSN 1345-059X
北海道大学 総合博物館

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MuseumNews

北海道大学総合博物館ニュース

ISSUE 46
July 2023
2023年7月発行



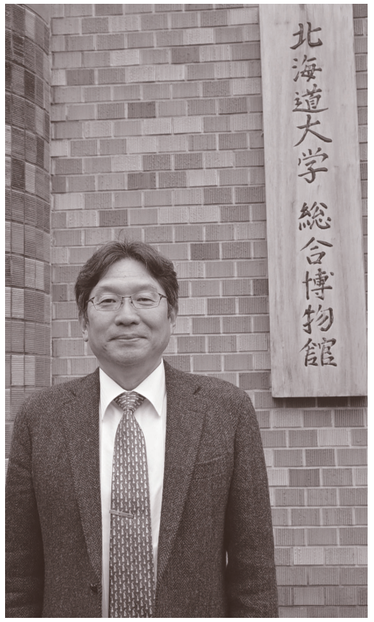
ティラノサウルスとカムイサウルス、大雪像になる

CONTENTS

01 新館長就任挨拶
02 プレスリリース
07 退任挨拶
09 卒論ポスター発表会
11 クラーク博士の玄孫ご家族来訪

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM
北海道大学総合博物館

新館長就任挨拶



4月1日に北海道大学総合博物館長に就任した獣医学研究院の坪田です。普段はクマやシカなど野生哺乳類を対象に主に生理生態学的研究を行なっています。野外調査のためフィールドに出ることも多く、ナチュラルヒストリーを包含する博物学には比較的近い分野にいます。これから2年間、総合博物館運営の舵取り役として尽力する所存ですので、ご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願いします。この2年間で取り組む総合博物館の課題については追々考えていくとして、就任にあたって今考えていることを記していきます。

総合博物館の一番大事な役割は、大学と市民とを繋ぐ最前線であり続けることだと考えます。年間20万人ほどの来館者を迎える場所として総合博物館は既に大学の顔となっています。札幌市街地のど真ん中に位置する北大は、札幌市民や札幌を訪れる観光客の憩いの場であり、観光スポットともなっています。その中にあって総合博物館は、ふらっと立ち寄るにはとてもいい立地条件と言えます。当然、訪問者は総合博物館に北大のエッセンスを知る情報源としての機能を期待します。その期待に応えるべく展示法やそのコンテンツにはさまざまな工夫が施されています。と同時に、展示品を前に活発なコミュニケーションやサイエンスに触れることができるサロンの場として機能することが求められます。重要なことは、市民が気軽に何度でも訪れたくなるような場所であり続けることだと思います。

次に大事な点は、科学を伝える、見せる、聞かせるプロフェッショナルであることです。総合博物館は北大の教育研究施設であると同時に、他の博物館と同様、展示を生業とするプロの方々が日々活躍する場所でもあります。研究者だけではなし得ない、複雑で難解な科学情報を市民にわかりやすく伝えるための創意工夫が各所に散りばめられています。来館者には、一つ一つの展示について時間をかけてじっくり見ていただきたいと思います。

3つ目に大事な点は、標本や資料の収蔵庫であることです。すなわち、貴重な標本や資料コレクションをほぼ永久に保存することが総合博物館には求められます。現在、総合博物館には300万点を超える標本や資料が収蔵されています。展示に供されることがないものも多く含まれますが、いずれも科学的あるいは歴史的に貴重なものばかりです。将来的にいつどこで活用されるかわからないものの、これらを劣化させることなく保存し続けること自体に意義があると考えます。

4つ目に大事な点は、博物学の人材を育てる器であることです。古くは古代ギリシャ時代にまで遡る博物学ですが、今でも博物学は重要な学問の一つです。動物学、植物学、古生物学、考古学、民俗学、民族学、歴史学などの総体として博物学が位置付けられます。先に書いたように、学問の面白さを一般の方々に伝える部分も含めて博物学の守備範囲は相当広いと言えます。このような博物学の発展とともに、次世代を担う人材の育成を行うのも総合博物館の使命と考えます。

最後にもう一つ挙げるとしたら、学際分野の研究や活動を共同・協働することでしょう。総合博物館の人的資源を活用して、他部局の先生方と共同研究を展開したり、研究以外の活動を協働したりすることは総合博物館の活性化につながります。総合博物館のさまざまなハードおよびソフト面での強みを活かして知の交流を促進していきます。総合博物館が大学の顔であると同時に知の拠点になることを目指します。

坪田敏男
（総合博物館長・獣医学研究院教授／野生動物医学）


ネパール・ヒマラヤのヒグマ調査地にて

プレスリリース

「水草の王様」希少種ナガバエビモの新産地を発見 ～道北地方に比較的広く現存する可能性を示唆～


写真1：稚内市で新たに発見されたナガバエビモ

ナガバエビモとは？

ナガバエビモ*Potamogeton praelongus* Wulfenは、ヒルムシロ科の多年生の水草です（写真1）。水面に浮く葉（浮葉）を持たず、植物体全体が水中に沈んで生育します。水中に展葉する半透明の葉（沈水葉）が長さ10cmを超える大型の草体をもつこと、葉の先端がボートの舳先のような形に反り返るのが特徴で、その優美な姿から「日本の沈水植物の王様」と呼ばれたこともありました。筆者は一連の研究でナガバエビモを何回も観察している数少ない日本人だと思いますが、いつ観察しても見飽きることがありません。

本種は北半球の亜寒帯を中心に広く分布しますが、日本国内の分布は北海道と長野県のみに限られています。長野県の記録は古く近年の生育は報告されていないので、国内ではほぼ北海道でしか見ることができない種と言えるでしょう。しかし北海道でも、かつては広く分布していたものの、水質汚濁などが原因で既知産地から次々と激減あるいは消滅し、希少な水草となってしまいました。環境省レッドリストでは、絶滅危惧種の中で最も絶滅リスクの高い絶滅危惧IA類に指定されています。2017年からは、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」により許可のない採取や販売が規制される国内希少野生動植物種にも指定されています。

発見の経緯

2020年、筆者は、別件で訪れていた稚内市沿岸部にある湖沼で、岸に漂着している長さ4cm程度の水草の葉の断片を発見しました（写真2）。葉の先端がボートの舳先状にわずかに反り返っていることが気になり翌日改めて調査したところ、沼の中央部に1株のナガバエビモが生育しているのを発見しました。

同時期に、当時北海道大学水産学部2年生であった廣瀬朋輝さんが、稚内市と猿払村の沿岸部の2か所の水辺でナガバエビモの生育を発見しました。ある夜筆者が布団でSNSをチェックしていたところ、廣瀬さんがアップロードしていたナガバエビモの写真が偶然目に止まりました。連絡をとったところ北大生であることがわかり、総合博物館で詳細を聞くことになりました。曰く、水草には以前から興味を持っており、昆虫採集のため訪れた道北地方の水辺で見たことのない水草を見つけて気になったので撮影したとのことです。国内希少野生動植物種であることを知ると集団に何らかの悪影響を与えなかったかと動揺するような、生き物を愛する心優しい青年でした。廣瀬さんは現在農学院の昆虫体系学研究室に所属する大学院生で、当館の昆虫ボランティアでもあります。このときに昆虫ボランティアを紹介してはいましたが、次に昆虫作業室（N314B）で再びお会いしたときは驚きました。

研究の経過と今後の展望

私と廣瀬さんが同時期に狭いエリアの複数地点でナガバエビモを確認したことから、ナガバエビモがこの地域に広く現存している可能性が考えられました。道北地域ではこれまでもナガバエビモの記録はありましたが、いずれも断片的なもので、現在の分布や生育状況は不明でした。そこで翌年の7～8月に改めて現地調査を行うことになりました。

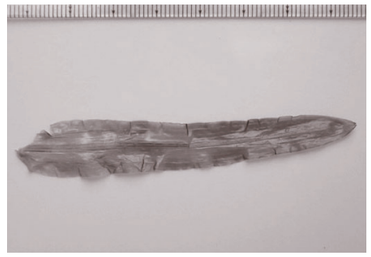
調査の結果、新たに2つの池沼でナガバエビモを発見することができました。探索できた水辺は少ないものの、かなりの高頻度で生育を確認することができました。道北沿岸地域にはナガバエビモが現在も広く生育している可能性があります。論文では、ナガバエビモの生育状況のほか、低水温を好むとされる本種が、この地域の湧水に依存して分布している可能性についても議論しました。詳しくは、プレスリリースをご確認ください。

今後も、この地域でナガバエビモの新たな集団が発見される可能性が期待されます。ただし、本種は種の保存法により、許可のない採集・譲渡・販売には厳しい罰則が設けられています。疑わしい植物を発見した際は、すみやかにお近くの博物館等施設や環境省保護官事務所等にご相談ください。

書誌情報：

Shutoh, K., Hirose, T., Shibahara, T., Yamazaki, M., Shiga, T. 2022. Obtaining new records of critically endangered *Potamogeton praelongus* (Potamogetonaceae) depending on groundwater springs in northern coastal areas of Hokkaido, Japan. Journal of Asia-Pacific Biodiversity 15(4): 665–670. doi: 10.1016/j.japb.2022.07.004

首藤光太郎
（研究部助教／植物体系学）


写真2：稚内市の湖沼の岸に漂着していたナガバエビモの葉

プレスリリース

絶海の岩礁ベヨネース列岩から新種のウオノエ科甲殻類を発見
～龍のような宿主で暮らす「六分儀」～



ベヨネース列岩と宿主のヒメダツ（撮影：栗岩薫氏）

ウオノエ科（Cymothoidae）は魚類の口の中やエラ、体表などに寄生する甲殻類で、ダンゴムシやフナムシ、ダイオウグソクムシなどと同じ等脚目に属しています。ウオノエの仲間は世界から約45属360種以上、日本だけでも40種ほどが報告されており、その大部分は海水種です。亜寒帯から温帯、亜熱帯にまたがる日本の海には3000種を超える多様な魚類が生息していることから、その寄生生物であるウオノエ類にもまだ知られていない種が数多くいると考えられます。しかし、離島や外洋のように調査自体が容易に行えない場所も多く、その多様性はベールに包まれています。

今回、私たちの研究グループは、伊豆諸島ベヨネース列岩および八丈島で採集されたヒメダツ（ダツ科の魚類）のエラから未知のウオノエ類を発見し、新種リュウノロクブンギ*Mothocya kaorui*として記載しました。「ベヨネース列岩」と聞いて、どこにあるか答えられる人は少ないのではないでしょうか。伊豆諸島南部に位置する八丈島や青ヶ島のさらに南、小笠原諸島との間に飛び石のように点在する無人島群の一つで、まさに「絶海の」と形容するにふさわしい場所です。

本種の種小名kaoruiは、このベヨネース列岩でホロタイプ（学名の基準となる世界でただ1つの標本）が寄生していたヒメダツを採集した魚類研究者、栗岩薫博士への献名です。ベヨネース列岩周辺は海底火山の活動が活発で、今回のプレスリリース直前にも噴火警報が発令されていました。栗岩博士はベヨネース列岩以外にも火山列島などの調査が困難な地域の魚類相を勇猛果敢に解明してきた第一人者であり、今回の献名はそのフロンティア精神を讃えてのものです。

リュウノロクブンギを漢字で表せば「龍の六分儀」となります。この標準和名は、宿主ヒメダツが龍のような姿であること、そして、寄生するリュウノロクブンギの真っ黒な腹尾節が航海で用いられる計器「六分儀」のように見えることにちなみます。六分儀は古くから大海原で船の位置を特定するために欠かせないもので、水産科学館（函館）や東京にある学士会館の北大ブースにも実物が展示されています。なお、リュウノロクブンギのタイプ標本の一部（パラタイプ）は、水産科学館に収蔵されています。

リュウノロクブンギには黒い腹尾節以外にも珍しい形態的特徴があります。その一つが、節が完全に融合した小触角です。ウオノエ科の小触角は、通常複数の節に分かれていますが、リュウノロクブンギではそれが融合して、ぽってりとした一つの塊となっています。このような触角を持つ種はウオノエ科全体を見渡してもいないため、発見当初は新しい属を設立することも考えました。しかし、ミトコンドリアDNAを解析した結果、サヨリに寄生するサヨリヤドリムシなどと同じエラヌシ属に含まれることが示されました。



リュウノロクブンギのホロタイプ標本



現代の航海用六分儀（水産科学館所蔵）

今回の発見では、過去の魚類相調査で採集されて博物館に保管されていた魚類標本が重要な役割を果たしました。私の研究グループでは、宿主の自然史標本を寄生虫の視点から再評価する研究を進めており、一昨年にも水産科学館の深海サメ標本からウオノエ科の稀種を発見しています（博物館ニュース第42号参照）。今後もこういった「隠れた」生物多様性を明らかにしていくことで、博物館標本を後世に受け継いでいく意義を新しい視点から示していきたいと考えています。

書誌情報：

Kawanishi, R., Miyazaki, Y., & Satoh, T. P. (2023). *Mothocya kaorui* n. sp. (Crustacea: Isopoda: Cymothoidae), a fish-parasitic isopod with unique antennules from the Izu Islands, Japan. Systematic Parasitology, 100: 231–244. https://doi.org/10.1007/s11230-023-10083-7

川西亮太
（資料部研究員・北海道教育大学釧路校准教授）

プレスリリース

恐竜の喉化石

福島県立博物館の吉田純輝学芸員（兼 北海道大学総合博物館資料部研究員）、北海道大学総合博物館の小林快次教授、アメリカ自然史博物館のマーク・ノレル博士の研究グループは、恐竜の喉頭の化石を研究しました。この研究成果をオンライン公開の学術専門誌Communications Biology（ネイチャー・ポートフォリオ社）に掲載しましたので、その内容をここで解説します。

動物の進化において、言語や歌は高度で画期的な音声コミュニケーションだと考えられています。哺乳類であるヒトや鯨類だけでなく、鳥類も重要な研究対象として注目されています。鳥類では、その他の四足動物と異なり、肺から出た空気が気管支付近の声帯（鳴管）を振動させ、気管そして喉頭を通って、発声されます。しかしながら、この鳥類に特徴的な音声器官とその進化について、鳥類および爬虫類の化石研究は極めて少なく、これまで鳥類の祖先である恐竜の喉頭の化石は全く知られていませんでした。そのため、恐竜の音声について手がかりとなる研究はありませんでした。

私たちは、非常に保存状態の良い恐竜化石を得ることに成功しました。その化石は、2005年にアメリカ自然史博物館がモンゴル・ゴビ砂漠で発見した、中生代・白亜紀（約8,400～7,200万年前）の恐竜ピナコサウルスの化石です（図1）。ピナコサウルスとは、背中を覆う装甲板のような皮骨がヨロイのように身を守り、四足歩行の植物食恐竜で、その化石はゴビ砂漠から記録されています。本研究で使用したピナコサウルスの標本は、世界でも最上級に保存状態であり、ほとんどの骨が繋がった状態で化石になっていました。私たちはこのピナコサウルス化石に「恐竜の音声進化」の手がかりを求めました。

今回の研究では、アメリカ自然史博物館が発見したピナコサウルスを詳細に観察・記載し、日米の博物館に収蔵されている現生鳥類・爬虫類の喉頭骨標本100点以上と比較しました。その結果、ピナコサウルスの頭骨に残された不明瞭だった骨が、世界で初めて恐竜の喉頭骨（輪状骨、舌骨、披裂骨）であることを発見しました（図2）。これまで、喉頭骨は化石にならないと考えられていましたが、本研究によって恐竜類でも喉頭骨が化石になることを初めて示し、ピナコサウルスの喉頭化石が世界最古の喉頭骨の化石となりました。

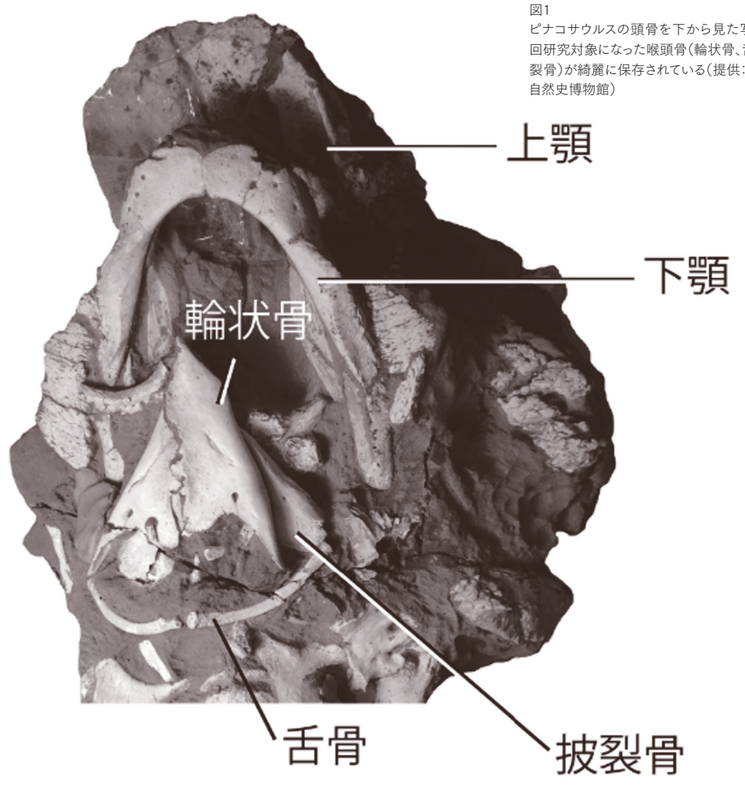


図1
ピナコサウルスの頭骨を下から見た写真。今回研究対象になった喉頭骨（輪状骨、舌骨、披裂骨）が綺麗に保存されている（提供：アメリカ自然史博物館）

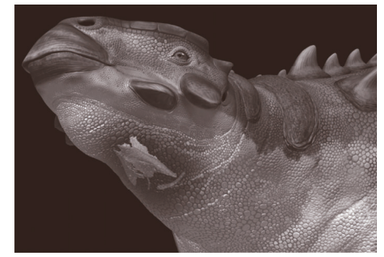


図2
ピナコサウルス頭骨の復元イメージ図。コンピュータ上で復元されたピナコサウルスの喉頭骨（喉の下に薄く表現されている数個の骨）。本研究で初めて中生代恐竜類の喉頭が明らかになった。制作：新村龍也。

さらに、私たちはピナコサウルスと現生鳥類・爬虫類の形態も比較することで、恐竜ピナコサウルスの喉頭骨が鳥類に類似していることを見出しました。ピナコサウルスの喉頭は、大きな輪状骨を持つ、披裂骨が大きな突起を持つ、披裂骨が長い、輪状骨と披裂骨の間に関節を持つといった、鳥類との類似性を発見しました。これらピナコサウルス喉頭の特徴は、鳥類に見られる声門部の変形や音声拡散など音声コミュニケーションに適した形態をしており、恐竜類でも鳥類のような発声をおこなっていた可能性を示唆しました。

私たちの研究は、これまで未解明領域であった「恐竜類の発声とその進化」という絶滅動物研究における大きな一歩といえます。今後、研究者にとっても未知の骨だった喉頭骨について研究が進むと予想され、本研究は萌芽的かつ象徴的な研究になりえます。他の恐竜類などから喉頭骨の化石がさらに発見されれば、これまで極めて難解だった絶滅動物の音響生態・音声進化の解明が大きく期待できます。

吉田純輝
（福島県立博物館学芸員・北海道大学総合博物館資料部研究員）
小林快次
（研究部教授／古生物学）

プレスリリース

特別天然記念物・アホウドリ2種の交雑の歴史を解明



鳥島・燕崎コロニー（従来コロニー）のアホウドリ

アホウドリは、主に伊豆諸島鳥島と尖閣諸島で繁殖する特別天然記念物の海鳥です。19世紀末までは小笠原諸島や大東諸島などでも繁殖しており、個体数も数百万羽いたと推定されています。羽毛採取のために島々で大量に捕獲されたことにより急激に減少し、一度は絶滅したと考えられました。しかし、1951年に鳥島で、1971年には尖閣諸島でそれぞれ約10羽が再発見されました。その後の保全の成果もあって、現在個体数は約6,000羽以上に回復したと推定されています。

アホウドリは暗黙のうちに1種とされてきました。しかし、2021年に私たちは鳥島と尖閣諸島の集団は別種であることを明らかにしました。そして、前者を「アホウドリ」、後者を「センカクアホウドリ」と呼ぶことを提案しました。一方、鳥島の初寝崎コロニー（新コロニー）では、標識足環のある鳥島生まれの個体と、尖閣諸島生まれの可能性がある標識足環のない個体の間に生まれた雛が複数観察されています。これは両種が交雑している可能性を示すものです。そこで私たちは遺伝的解析から2種の交雑の可能性を検討しました。

遠距離からの観察や雛の形態の観察から「アホウドリ」と「センカクアホウドリ」の確実な識別は困難です。そこで、①鳥島の燕崎コロニー（従来コロニー）生まれの雛、②尖閣諸島生まれと考えられる標識足環のない鳥、③鳥島の新コロニー生まれの片親または両親が標識足環のない雛を対象に分析しました。

その結果、鳥島の従来コロニー生まれの雛と尖閣諸島由来と考えられる標識足環のない鳥は、基本的に異なる遺伝的集団に属することが分かりました。このことは、両者が別種であることを支持するものです。一方、従来コロニー生まれの雛には、標識足環のない鳥と同じ遺伝的集団に由来すると考えられる個体や、両方の遺伝的集団に由来する遺伝子を中程度に持つ個体も含まれることが分かりました。後者は両種の交雑個体と考えられます。

片親が標識足環のあるつがいから生まれた新コロニーの雛は、いずれかの遺伝的集団に由来する遺伝子を高頻度で持つと推定されました。これらの雛のうちの1羽は、標識足環がなく尖閣諸島生まれと推定されたオス個体、「デコちゃん」の子どもです。その名は、新コロニー形成のために設置した特定のデコイとつがいを形成しているような行動に由来します。デコイ作戦の終了後、デコちゃんと標識足環のある鳥島生まれの鳥の間に生まれた雛は交雑個体と考えられてきました。しかし、今回の分析でそのつがい相手ももともと尖閣諸島にルーツのある鳥であったことが分かりました。

アホウドリは一夫一妻の長寿の鳥です。ほとんどの場合、つがいの片方が死ぬまでつがい相手を変えません。また尖閣諸島生まれと推定される標識足環のない個体は従来コロニーでは観察されていません。このことから、従来コロニーの2種間のつがい形成は個体数が少なかった時期におこなわれたと考えられます。一方、交雑個体の可能性が考えられた新コロニー生まれの片親のみ標識足環のある雛では交雑の証拠は認められておらず、2種間のつがい形成は現在ほとんどないと推定されました。

両種は同じ場所で繁殖しても基本的にそれぞれ同じ種の鳥をつがい相手に選ぶため、今後も別種として維持されると考えられます。アホウドリの保全政策は、「アホウドリ」と「センカクアホウドリ」の独自性を保つことを念頭に置いて進めることが求められます。

江田真毅
（研究部教授／考古鳥類学）



鳥島・初寝崎コロニー（新コロニー）に設置されていたデコイと「デコちゃん」の巣

プレスリリース

長門構造帯は日本最古級の地質体の一部

北海道大学総合博物館の北野一平助教、九州大学の小山内康人名誉教授、同大学大学院比較社会文化研究院の中野伸彦准教授らの研究グループは、山口県西部に分布する長門構造帯の構成岩石（変成岩類及び花崗岩類）から初めてジルコンのU–Pb同位体年代測定を行い、長門構造帯は国内最古級の地質体である黒瀬川構造帯に帰属する可能性を見出しました。本研究成果は、2023年1月23日（土）に日本鉱物科学会が刊行する国際誌Journal of Mineralogical and Petrological Sciencesで公表されました。

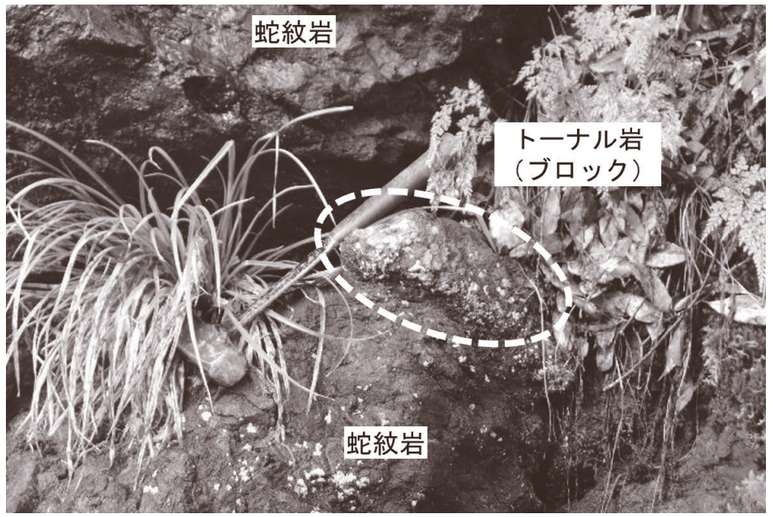
長門構造帯は山口県西部で北北東―南南西方向に断層沿いに分布する狭長な地質体で、様々な深成岩（斑レイ岩、閃緑岩、花崗岩、トーナル岩など）、変成岩（角閃岩、片麻岩、片岩、石灰珪質岩など）、堆積岩（泥岩、砂岩、礫岩、石灰岩、チャート、凝灰岩など）が蛇紋岩中に混在している蛇紋岩メランジェで構成されています。これまでK–Ar系放射年代測定法などにより、長門構造帯は中部日本に分布する蛇紋岩メランジェの飛騨外縁帯の西方延長と考えられてきました。しかし、長門構造帯の構成岩石は著しく変質しているため、二次的な影響で初生的な同位体組成が改変しやすいK–Ar系放射年代には正確度に検証の余地がありました。そこで、本研究では、強固なタイムカプセルとして知られるジルコンという鉱物を長門構造帯の変成岩類（角閃岩、片岩、石灰珪質岩）及び花崗岩類（トーナル岩）から分離・抽出し、ジルコンのU–Pb同位体組成を高精度に測定することで、正確な年代値を決定しました。

長門構造帯の北部（三隅地域）・中央部（台地域）・南部（豊ヶ岳地域）で地質調査を行い、露頭または転石から岩石試料を採取しました。採取した岩石試料を研究室で大型岩石カッターで切断し、薄片（切断及び研磨した岩石片をスライドグラスに張り付け、厚さ約0.03 mmまで研磨された試料）を作製しました。偏光顕微鏡で薄片を観察し、各岩石の組織、含有鉱物の組み合わせ及び量比、ジルコンの有無、変質の度合いなどを記載しました。さらに、粉末の岩石試料から分離したジルコンを分析し、U–Pb同位体年代を決定しました。

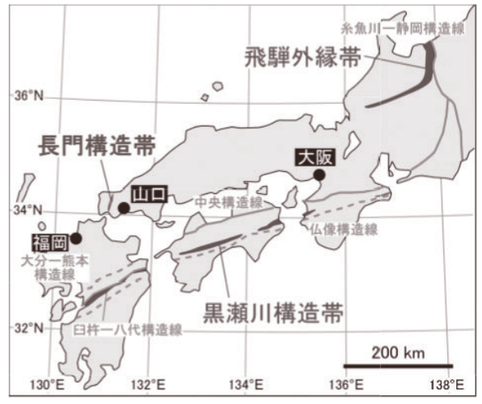
分析の結果、北部の三隅地域から採取された角閃岩は茶色がかった普通角閃石を含み、約4億6千万年前に形成した有色鉱物に富む苦鉄質火成岩を起源とすることが推察されました。中央部台地域のトーナル岩は優白色で、特徴的に黒雲母、白雲母、ザクロ石または緑簾石などのアルミニウムに富む鉱物を含みます。このトーナル岩は約4億7千万年前～4億6千万年前に発生した花崗岩質マグマに由来し、より古いジルコンを捕獲していたことが認められました。そして、南部の豊ヶ岳地域に産する片岩と石灰珪質岩は低変成度の鉱物組み合わせと約24億6千万年前～4億年前の砕屑性ジルコン年代で特徴づけられました。

本研究で明らかにされた長門構造帯の変成岩類と花崗岩類の鉱物組み合わせ及びジルコンU–Pb年代の特徴は、従来の帰属先である飛騨外縁帯の構成岩石の特徴よりもむしろ、西南日本の蛇紋岩メランジェである黒瀬川構造帯のそれによく合致します。すなわち、長門構造帯は、日本最古級の地質体である黒瀬川構造帯の一部である可能性が示唆されました。さらに、両者で共通する岩相の多様性と年代特徴から、長門構造帯及び黒瀬川構造帯に保存されている日本列島初期の基盤を成した岩石は、南中国地塊の活動的縁辺域で形成・発達した可能性が推察されました。

北野一平
（研究部助教／岩石鉱物学）



長門構造帯の岩石／長門構造帯に産する蛇紋岩中のトーナル岩ブロック



地質体分布図
長門構造帯、飛騨外縁帯、黒瀬川構造帯の地理的位置関係

退任のご挨拶

皆様の北海道大学総合博物館への多大なご支援に対して、心より感謝申し上げます。私こと小澤丈夫は、2023年3月31日をもって2期4年間の任期満了を迎え、館長を退任致しましたことをご報告申し上げます。

2018年の暮れ頃だったでしょうか。当館の旧知の先生方から、館長候補者となることへの打診を頂いた時には本当に驚きました。博物館学や博物館運営の経験はなく、当館の活動フィールドとは異なる建築デザインを専門とする私に何故というのが最初の印象でした。詳しくお話を伺ったところ、北海道大学本部と考え方の共有を図りつつ、大学博物館としての運営面を強化するために、キャンパスの施設環境整備や空間デザインに関わってきた私に力になってほしいという趣旨でした。それならば少しのお役に立てるかもしれないと思い、お受けする旨お返事をさせて頂きました。

2019年4月に館長職を拝命し、期待と不安を抱えながら着任いたしました。ところが、当館を取り巻く様々な状況、特徴、課題などを改めて一通り確認し、さあこれからとタイミングで、世界的規模の新型コロナウイルス感染拡大が、2020年2月頃から我が国にも大きな影響を及ぼし始めました。感染拡大防止のため人々の移動が停滞し、以降、当館の活動も大きな制限を受けることになりました。本学では、授業の大部分がオンライン化され、教職員の在宅勤務を推奨、学生、来訪者の姿が激減したキャンパスは、本来の姿とはかけ離れた閑散とした雰囲気に包まれるようになりました。最も厳しい時期、当館も数ヶ月にわたる休館を余儀なくされました。再開後も感染防止策を徹底することが求められ、関係者の方々には多大なご負担もおかけしました。館長任期4年の内3年間はまさにこのような状況下にあり、後の世代の方々が振り返ると、私は新型コロナウイルス禍の館長として名を残しているのかもしれません。



近年、我が国の博物館経営を取り巻く厳しい人的・財政状況、文化的インフラとしての脆弱への懸念が叫ばれています。また、博物館の所掌が文部科学省から文化庁にかわった過渡期にあって、政策、法制度、補助事業等の変容への対応、市町村、民間、全国及び道内にある多くの博物館との連携など、積極的な対外活動が必要となる中、これらを十分に行うことができなかったことが心残りです。それでも、当館教職員や関係者の皆様の積極的なご協力やご支援によって、いくつかの具体的な進展を見ることができました。誌面上、ここで全てをあげることは難しく割愛させて頂きますが、当館が大学博物館等協議会・日本博物科学会の幹事を担い、本年6月22日・23日には、第26回大学博物館等協議会・第18回日本博物科学会を、本学札幌キャンパスで実施することになったのもその一環です。

一方で、このような厳しい状況下だからこそできたこともありました。行動制限によって教職員の出張や外出が減り、当館の運営上の様々な進行中の課題や将来像について、これまで以上に、時間をとって議論することができたように思います。また、2020年10月の新総長着任によって一新された大学新執行部との間では、当館への期待や役割、方向性について懇談する機会も増え、一定の意思疎通を図ることができつつあります。このことが、当館の運営における下地となり、今後のより一層の発展に役立つことができれば幸いです。

個人的には、大変楽しい4年間でもありました。私が専門とする建築デザイン分野は、本学では工学研究院に属しています。工学は応用系の学問で、ものごとの背景にある真理や原理を追求しようとするいわゆる基礎系の学問とは位相が異なる面がありますが、実際の建築・都市・空間デザインでは、それらの知見をフルに動員して総合的な見地から丁寧に検討を重ね、適切な判断をタイムリーにしていかなくてはいけません。そのため、当館での仕事を通じて、理学や教育学の先生方のお考えに触れ、交流ができたことは大きな喜びでした。プライベートでの話も弾み、理学の研究者ならではのモノの見方、世界観、考え方、哲学など、先生方からお聞きするお話は、私にとってどれも新しく大変興味深いもので、まさに目から鱗でした。一方で、感染防止のため対面での接触を控える必要から、当館の活動に欠かせないボランティア、スタッフ、学生のみなさんと触れる機会を、十分に持てなかったのはやや心残りです。長年にわたり当館をご支援頂いたボランティアの方々を表彰する場で、初めてお目にかかれた方もおり、任期中にもっと多くの交流の機会をとることができていればと改めて感じています。

最近では、感染拡大が一定の落ち着きを見せるようになりました。政府による行動制限は大幅に緩和され、当館を訪れる方々も増えてきました。多くの方々の展示に対する真剣な眼差し、笑顔や楽しい会話が溢れる本来の姿を、当館が徐々に取り戻しつつあることを何より嬉しく思っています。私は、館長退任後も、本学教員として教育研究活動、また本学キャンパスの施設・環境整備の仕事を継続しております。退任後も変わらず私にできる博物館支援をしていきたいと思います。

これまでの4年間、ありがとうございました。皆様のご厚意に改めて深く感謝いたします。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

小澤丈夫
（資料部長・工学研究院教授）

第3回「建築の学生」展

●2022年10月8・9日

「建築の学生」展は、私たち工学部建築都市コースの学生有志が授業で制作した模型や図面を展示し、来場者に自分の提案を解説する企画です。2019・21年に続く今回は学部3年から修士1年までの14名の出展者に加えて文学部の学生が参加し、理系文系を越えた多学部多学年の学生が協働する建築展となりました。2室の会場の展示演出、作品紹介のキャプションの設置、Instagramへの作品投稿などは前回と同じですが、学生同士で出展作品の理解を深めてから展示レイアウトを決めたり、ウェブサイトをつくって会場の3D画像を公開したりと新たな試みも行いました。前回の約2倍となる859人の来場があり、多くの方が楽しめる建築展になったことが実感できました。

ここからは建築学生と文学部生の視点で、展示会の成果を報告します。

本展の成果（建築学生）

本展の企画運営を通して、建築を専門としない方々にどのように自分の考えを伝えるか、という表現の過程が最も難しく、同時にその面白さを実感することができました。

企画段階では、文学部の学生に自分の作品や考えを話し、他学部の視点から意見や感想をもらえた点が、自分の作品を見つめ直すきっかけになったと考えます。また、学部を越えた意見交換は、普段の授業では体験できないものでした。

当日の運営・作品解説では、本展の開催を知らずに訪れた方や、建築を学んでいる方など、建築に対する興味や知識が来場者によって様々で、どのような表現をすれば伝わるか、もっと違う伝え方はないかなど、対話の中で試行錯誤する過程がとても貴重な経験になりました。学部内の交流では、設計者の目線に依ってしまう傾向にありますが、本展を通して改めて利用者目線で建築を考えていくことの大切さを実感しました。

本展の成果（文学部生）

本展には文学部芸術学研究室から、修士と学部生の6人が参加しました。ほとんどが学芸員の課程を履修しており、学芸員を志す人もいます。文学部生は出品者ではなく、キュレーターという立場から本展に参加したと言えます。出品された作品を総合博物館でどのように展示するのか、建築学生と協力して考えました。

具体的な活動を2点挙げます。

1つ目はインタビューです。建築学生がこだわって作った作品を知らなければそれを活かす展示はできないと考え、学生一人一人に対して行いました。これにより、作品が誕生した経緯や作者自身の好きなところが浮き彫りになりました。文学部生は建築専門外の視点から作品に対する理解を深めることができ、また建築学生は彼らが意識していないところの指摘に、新たな気づきがあったようでした。

2つ目に、インタビューで得た情報をもとに作品の魅力を引き出せるレイアウトを考えました。建築学生の個人ブースは、それぞれインタビューを担当した文学部生が展示の仕方を決定し、それらを総合して全体のレイアウトをブラッシュアップしていきました。こうすることで、一人一人の作品の魅力が伝わりやすい配置となり、全体としてもメッセージ性のあるものになったと考えています。

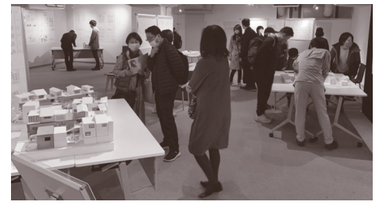
本活動は、実際の博物館で展示を作り上げられる非常に貴重な機会でした。他学部他学年の学生と違う視点から意見を交換し合う刺激的な経験となり、先生や学芸員とのかかわりの中で多くの学びがありました。

本展の一連の活動は最終報告書にまとめて整理しました。この成果を活かして、第4回開催に向けて準備を進めています。

佐々木悠貴（工学院修士2年）
金子千裕（工学部3年）
中村ゆりあ（文学部4年）



自分の作品を解説する建築学生



会場の様子



集合写真

担当学生：
金子千裕・中野桃花・堀下葵・伊藤貴洋・奥香奈美・山田悠介（工学部3年）
大澤菜緒・髙橋陸・茂崎秀祐・増田啓佑（工学部4年）
小澤大祐・北村彩香・齋藤惇・杉本匠（工学院修士1年）
佐々木悠貴（工学院修士2年）
伊東愛奈（文学部3年）
奥平美怜・中村美緒・中村ゆりあ・三田尾有希子（文学部4年）
上村麻里恵（文学院修士1年）

担当教員：
小篠隆生（工学研究院）、湯浅万紀子（総合博物館）

担当職員：
市來紗都子・柴野伸幸・渡邉洋子（総合博物館）

2022年度卒論ポスター発表会

●2023年3月4日・5日

https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/list/18939/
https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/list/18965/



多くの来場者と説明して対話する発表者達

北海道大学の学部4年生が卒業研究を1枚のポスターにまとめ、来場者にわかりやすく発表して質問に受け答えする「卒論ポスター発表会」を、3月上旬の週末2日間に館内のホールで開催しました。今年度で15回目となるこの取り組みは、当館が北大の全人教育の一環として展開しているミュージアムマイスター認定コースの社会体験型科目に位置づけており、コミュニケーション能力の涵養や異分野への関心の喚起、大学博物館への理解を深めることを目的としています。

発表には理学部3名と工学部2名が参加しました。1枚のポスターを完成させるまでに、3回の中間発表会に参加して、内容やデザインに関して当館の担当教員の指導を受けたり、他の発表者や発表会を運営する学生とのディスカッションを重ね、そこで得た意見を参考にして改訂を続けました。さらにさまざまな来場者を想定した説明のリハーサルを重ねて準備しました。発表会当日は、来場者との対話を楽しみながら解説していました。

発表会の運営は理学部・工学部・総合教育部・文学部の1年生から3年生まで7名の学部生が担当し、学内・学外向けの2種類のポスターと、発表者のメッセージや発表に関連した展示情報などを掲載したプログラムを制作した他、発表会当日は受付や司会を務めました。今年度もコロナ禍での安全で快適な運営が求められました。当日はメンバーが臨機応変に対応し、スムーズな運営を実現できました。

発表会の最後には、市民5名と本学教員5名から成る審査員の評価による「最優秀賞」と審査が拮抗したために特設された「優秀賞」、6名のミュージアムマイスターの合議による「ミュージアムマイスター賞」、SDGsへの貢献の可能性を評価する「SDGs賞」、2日間の来館者の投票による「来館者賞」の表彰式と講評会を行いました。「最優秀賞」は工学部の増田啓佑さん、「優秀賞」は理学部の矢倉鉄平さん、「ミュージアムマイスター賞」は理学部の伊藤政矩さん、「SDGs賞」は工学部の高橋陸さん、「来館者賞」は理学部の大野真緒さんが受賞しました。



広報や会場運営を担当した学生スタッフ

来場者には、さまざまな学部の4年生の研究成果を知っていただく機会となりました。発表者と運営担当学生の事後考察レポートには、コミュニケーション能力を身に付ける機会になっただけでなく、卒業研究を見直したり、他分野の学生の研究を知ったり、来場者から有意義なご意見をいただく貴重な機会となったことや、コロナ禍での発表会の運営をグループで担った達成感や課題などが綴られています。レポートや当日の様子は当館ホームページで公開しています。

発表者：

伊藤政矩（理学部）
「カムイサウルスとヤマトサウルスは何を食べていたのか？～歯の傷から生態を探る～」

大野真緒（理学部）
「むかわ町穂別産の頭の化石はサメ?エイ?」

髙橋陸（工学部）
「札幌市新川地区の三角屋根住宅群がつくる街並み」

増田啓佑（工学部）
「北海道大学旧札幌農学校図書館の変遷と現況」

矢倉鉄平（理学部）
「イグアノドン類の尾端骨様化石の結合過程の推定～しっぽの先端に隠された新種の可能性～」

運営担当学生：荒川大地（理学部2年）、柿澤彩花・木元友理香（工学部3年）、佐藤英・徳井翠（総合教育部1年）、田口駿登（工学部2年）、幸一尋（文学部3年）

教職員審査員：小澤丈夫（総合博物館 館長・大学院工学研究院 教授）・内田努（大学院工学研究院 准教授）・高橋英樹（名誉教授・総合博物館 資料部研究員）・出村誠（先端生命科学研究院 /生命科学院 / 理学部 教授）・山内彩加林（低温科学研究所 助教）

市民審査員：浅野目祥子（NPO法人手と手 代表理事・ミュージアムカフェぽらす/ミュージアムショップぽとろ 代表）・中道洋友（北海道札幌北高等学校 教諭）・西村卓也（北海道新聞社 論説主幹）・藤田良治（愛知淑徳大学創造表現学部 准教授）・矢野ひろ（北海道遺産協議会 理事）

ミュージアムマイスター審査員：太田晶（むかわ町経済恐竜ワールド戦略室）・押野祐大（北海道中標津高等学校 教諭・北海道大学環境科学院 博士3年）・遠藤優（理学院 博士2年）・高田健太郎（理学院 博士1年）・佐々木悠貴（工学院 修士2年）・大藪隼平（理学院 修士2年）

担当教職員：北野一平・小林快次・湯浅万紀子・市來紗都子・渡邉洋子

湯浅万紀子
（研究部教授／博物館教育学）

ミュージアムマイスター認定式

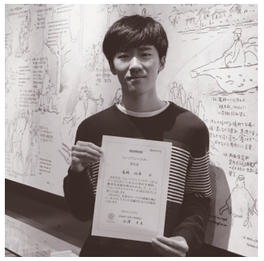
総合博物館では、本学が目指す全人教育の一端を担う教育プログラム「ミュージアムマイスター認定コース」を2009年度より展開しています。2022年度に、文学部4年 高橋佑希さん、水産学部3年 佐々木健太さん、総合化学院修士課程2年 堀井元章さんの3名が認定されました。3名の認定により、これまでにミュージアムマイスターに認定された学生は53名となりました。12月13日と3月15日に、ミュージアムマイスター認定式が執り行われ、水産科学館今村央館長と小澤丈夫館長より認定証が授与されました。認定式では両館長がミュージアムマイスターの意義を述べられ、その後認定された3名にコースで学んだことの振り返りや学習の過程で身につけたことについて語っていただきました。「プログラムを通じて学んだこと、蓄積させた経験を活かしていきたいです。」「専攻に留まらないマイスターコースを通しての博物館での学びは、私の思考の引き出しを大きく増やしてくれました。」「マイスターコースで得られた経験は、専門分野での学びや学芸員資格を取る際の学びともまた違う多くの経験を得ることができました。」と晴れやかに語る姿が印象的でした。マイスターコースで学んだ経験を活かし、これからもご活躍されることを期待しております。

マイスターコースについての詳細は、総合博物館のウェブサイトをご覧ください。

市來紗都子
（研究支援推進員）



佐々木健太さん



高橋佑希さん



堀井元章さん

さっぽろ雪まつりに迫力の恐竜大雪像登場

新型コロナ感染拡大のため3年間開催されていなかった「さっぽろ雪まつり」が2023年2月4日から11日までリアルイベントとして開催されました。まつりの顔である大通西4丁目STV広場の大雪像制作に当館の小林快次教授が協力しました。制作された大雪像は、実寸大の「ティラノサウルス」と「カムイサウルス」で、7200万年前の北海道を表現した雪像です。レリーフ状のティラノサウルスと、3次元立体のカムイサウルスと、迫力のある恐竜が再現されました。この雪像には、SDGsのメッセージが込められ、雪像の横に建てられたパネルのメッセージには、「こんなに大きくて強い恐竜たちも、約6600万年前の隕石衝突による環境変動によってみんな絶滅していまいました。隕石衝突による火災や津波、酸性雨や長い冬によって、恐竜を初め地球上の75%の生命がいなくなったといわれています。そして現在、人間が変え続けている環境破壊によって、恐竜絶滅よりも壊滅的な速さで地球上から生命がいなくなっていると言われています。私たち人間は、恐竜のように絶滅してしまっていいのでしょうか。恐竜のように絶滅しないよう、みんなで環境のことをよく考え、一丸となってその重要性を伝えあうことによって、なんとか絶滅を逃れるようにしませんか？未来の生命体によって、「絶滅した人間」の雪像が作られることがないように頑張りましょう。」と書かれていました。国内外の多くの方々に楽しんでもらえたようです。



雪まつりの雪像

小林快次
（研究部教授／古生物学）

クラーク博士の玄孫ご家族が札幌農学校第2農場、総合博物館を訪れました

2023年1月9日、クラーク博士の玄孫のブラッドフォード・シーウェルさんが、ご家族と共に初めて北海道大学を訪れました。

シーウェルさんご家族は、大学事務局で寳金清博総長を訪問後、大学構内を巡り、札幌農学校第2農場、総合博物館へお立ち寄りいただきました。

寒い1月ですが当日は穏やかな冬晴れとなり、第２農場では当館資料部研究員の近藤誠



近藤名誉教授より解説



大原教授より解説

司名誉教授よりクラーク博士縁のモデルバーンの解説を受けました。

モデルバーン建物内外観、農業器具等について近藤名誉教授のユーモアを交えた解説を受けながら、じっくりご覧いただきました。

その後、シーウェルさんご家族は総合博物館展示室へ移動、当館の大原昌宏教授より大学の歴史コーナーにある展示パネルやケースに入っている資料を前にクラーク博士の功績について解説を受けました。

シーウェルさんご家族は、大原教授への質問を交えながら熱心な様子でクラーク博士の展示をご覧いただきました。

井上 猛
（事務部係長）



冬晴れの中、建物解説

土曜市民セミナー再開

3年にわたり開催を見合わせていた土曜市民セミナーを２０２３年1月より再開いたしました。コロナ禍における各分野の取り組みの紹介をテーマとし、総合博物館の教員が最新の研究内容について講演しました。セミナーは、北海道大学の感染症対策に基づく厳重な対策を行いながら、事前申込制・定員50名の枠を設けて3月まで月1回開催しました。記念すべき再開第1回は1月21日に行われ、北野一平助教が「コロナ禍での地質学・岩石学研究一例」と題して講演しました。セミナー当日のあいにくの悪天候にもかかわらず、事前込みをされた多くの方にご来場いただき、研究に対する皆様の関心の高さが伺えました。

2月11日に開催された第2回は、小澤丈夫館長（当時）が「北海道大学札幌キャンパスにおける歴史的建造物の保存と活用-近年の取り組みと課題-」と題して講演しました。北大構内の歴史的建造物の修復工程等、興味深い数々のお話に、来場者は時折メモを取りながら熱心に聞き入っていました。また第3回（3月11日）は小林快次教授が「恐竜化石調査 アラスカからモンゴルへ」と題して講演しました。当日は開演前から多くの方が来場し、大盛況となりました。質疑応答の時間には、とくに小学生の来場者から多くの質問が寄せられ、小林教授が1つ1つ丁寧に回答されていました。

2023年度は土曜市民セミナーを毎月開催の予定です。皆様のご来館をお待ちしております。

市來紗都子
（研究支援推進員）



第2回セミナー会場全体の様子



第1回セミナー会場の様子



第3回セミナーポスター

2022年度ボランティア講座＆交流会

●2023年1月21日

15グループで活動している約200名の博物館ボランティアに、ご自身の活動分野への知見を深めたり、所属グループ以外の博物館活動にも関心を広げたり、相互交流を図っていただくために、博物館ではボランティア講座＆交流会を開催しています。コロナ禍により中断していたこの講座＆交流会を、今年度は1月に再開することができました。同じくコロナ禍を経て再開した当館の「土曜市民セミナー」の北野一平先生の講演を講座に位置付けました。北野先生の講演「コロナ禍での地質学・岩石学研究一例」では、地質学の基礎から分かりやすく解説され、これまでスリランカや南極の地史の一端を岩石中のジルコンを用いて解析してこられた先生がコロナ禍で展開した国内での地質調査の成果もご紹介いただき、先生の研究史と今後の展望が明快に語られました。

12グループから二十数名のボランティアが参加され、セミナー・講座終了後に会場に残っていただき、北野先生との質疑応答を深め、参加者と交流する時間を設けました。そこでは、フィールドワークの実際について、たとえばフィールドに研究者として初めて入る緊張感と高揚感や、白夜の南極では長時間にわたって調査できることへの喜びなど、詳しく語っていただきました。また、参加者の方々と普段のボランティア活動の実際についても情報交換がなされました。

湯浅万紀子
（研究部教授／博物館教育学）

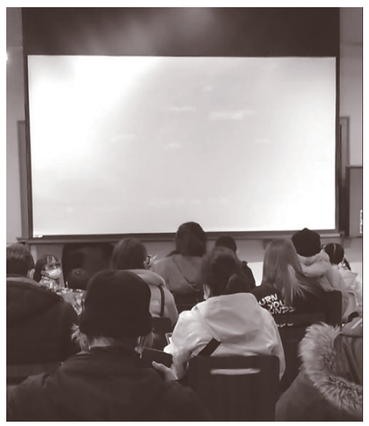


北野先生とボランティアの方々の質疑応答が活発になされた交流会

宇宙の4Dシアター

宇宙の4Dシアターボランティアでは、2022年度の下半期にコロナ対策を徹底しながら4回の公演を開催しました。まず、7月のカルチャーナイトで好評でした「Nociw kur ka maknatara（星影冴かに光れる北を）―アイヌの物語にみる星たち―」のリバイバル公演を9月17日(土)に行いました。アイヌに伝わる星の物語「老婆と兄弟」、「働き者の兄弟」、「暁の明星」の3話を紹介し、今回も多くの方々にご鑑賞いただきました。続いて、「人に話したくなる宇宙の旅」と題して10月22日(土)・11月5日(土)に公演を実施しました。宇宙に関する高度、距離や大きさなどのミニ知識をわかりやすい例え・スライドとともに説明しながら宇宙を旅する内容で、こちらも盛況となりました。ミニチラシを配布し、国際宇宙ステーション（ISS）を見るイベントや、11月8日の皆既月食、12月1日の火星最接近といった天文イベントについての告知も行いました。そして、3月4日(土)に、「陰陽師が見たかも知れない星ぼし」の公演を行いました。お子様向けに安倍晴明で有名な陰陽師という仕事と星空の意外な関係について、過去の陰陽師たちが見たであろう星空を再現したり、陰陽師が記録した超新星爆発の残骸と考えられているかに星雲まで旅をしたりしながらわかりやすく説明しました。この日は、知の交流ホールで卒論ポスター発表会が開催されていましたが、卒論ポスター発表会と4Dシアターの公演の両方に足を運んでいる方が多く見受けられました。

北野一平
（研究部助教／岩石鉱物学）



公演前の様子

小さなちいさな哺乳類　トガリネズミ展―骨までみせます！

●2022年11月29日～12月26日

トガリネズミの展示は今回から恒例企画となりました。今年はヒメトガリネズミ、オオアシトガリネズミ、チビトガリネズミとジャコウネズミの生体展示を行ないました。企画には東海大学札幌キャンパスと北大低温科学研究所に後援、円山動物園に協力をしていただきました。生体展示した個体のほとんどは動物園で飼育しているものを貸与してもらいました。

生体展示の他に、東海大学（河合久仁子研究室）のトガリネズミの音声の研究についての研究成果と円山動物園のヒメトガリネズミの出産事例に関するポスター展示をしました。さらに今回の看板展示としてトガリネズミ類やモグラ類の全身骨格の展示を行ないました。展示品には日本に生息するほとんどのトガリネズミ類とモグラ類が含まれており、貴重な展示となりました。展示したすべての骨格標本はえぞ骨団の佐藤亜希子さんに制作してもらいました。



今回の目玉展示である
トガリネズミやモグラの全身骨格標本

2022年には円山動物園で史上初めてヒメトガリネズミの完全飼育下繁殖に成功し、ネットや新聞等で話題になりました。これに関連し、企画最終日には知の交流ホールにて、円山動物園の飯島なつみさんがヒメトガリの飼育下繁殖の成功例について報告し、また大舘がトガリネズミを含む真無盲腸類の生態と進化についての講演を行い、満員御礼の盛会となりました。

今回は10名の北大の学部・大学院生に飼育ボランティアやTwitterの管理をしてもらいました。特に三枝弘典くんは骨格標本の展示もアレンジをしました。さらにミュージアムショップでは関連グッズとして、著名な進化学者の長谷川政美先生がデザインしたトガリネズミを中心とする真獣類系統樹マンダラのポスターを制作・販売してもらいました。

大舘智志
（資料部研究員・低温科学研究所助教）

◎関連企画の講演会の様子は博物館の
映像アーカイブ（Youtube）に保存されています。
https://youtu.be/vH_rxQHNpco

年次報告会

3月15日に「令和４年度年次報告会」がオンラインで開催されました。まず最初に小澤丈夫館長による挨拶で会がスタートし、小林快次研究部長によって、1年間の北大総合博物館の活動を報告、その後、北大水産科学館の田城文人先生から研究の紹介がありました。資料部研究員からは、川西亮太先生から、魚の口に寄生するウオノエについて説明があり、日常あまり見ないような変わった生物について紹介がありました。北大院生の清水洲平さんには、モンゴルの恐竜化石について発表をしていただきました。ボランティア活動としては、4Dシアターが再開され盛況だったことを福澄孝博さんに報告いただきました。最後に、小澤館長に閉会の挨拶をいただきましたが、来年度は対面での開催を予定しています。

小林快次
（研究部教授／古生物学）

水産科学館長期休館

水産科学館は、施設の建て替え（『水産科学未来人材育成館』／令和6年秋開館予定）並びにそれに伴う移転準備作業のため、下記の期間展示施設を休館します。休館中は館内見学及び収蔵資料の利用対応ができません。（※水産生物標本館の利用については従前どおりとなります）

【休館期間】
令和5年4月1日～令和6年秋（予定）
【休館施設】
水産科学館展示本館（施設老朽化のため既に休館中）
水産科学館展示別館（新規休館対象施設）

ご迷惑をおかけしますが、
ご理解・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

2022年度 後期記録

令和4年10月から令和5年3月までに行われたセミナー・シンポジウム

[トガリネズミ展]公開セミナー
飯島なつみ（円山動物園）
大舘 智志（北海道大学低温科学研究所 助教）
日時：12月18日(日)13：30～15：00
参加者：50名

土曜市民セミナー「コロナ禍での地質学・岩石学研究ー例」
北野 一平（北海道大学総合博物館 助教）
日時：1月21日(土)13：30～15：00
参加者：30名

土曜市民セミナー「北海道大学札幌キャンパスにおける歴史的建造物の保存と活用- 近年の取り組みと課題 -」
小澤 丈夫（北海道大学大学院工学研究院 教授）
日時：2月11日(土)13：30～15：00
参加者：29名

土曜市民セミナー「恐竜化石調査 アラスカからモンゴルへ」
小林 快次（北海道大学総合博物館 教授）
日時：3月11日(土)13：30～15：00
参加者：50名

令和4年10月から令和5年3月までの主な出来事

10月8日	第3回「建築の学生展」開催（～10/8）
10月22日	4Dシアター「人に話したくなる宇宙の旅」開催
11月5日	4Dシアター「人に話したくなる宇宙の旅」開催
11月29日	「小さなちいさな哺乳類　トガリネズミ展 －骨まで見せます！－」（～12/25）
12月15日	在札幌アメリカ合衆国総領事ご一行（4名） 博物館見学
1月9日	クラーク博士の玄孫ご家族(4名)博物館、モデルバーンご来訪
1月31日	横浜国立大学総務企画部ご一行（4名） 博物館見学
2月8日	沖縄美ら海水族館ご一行（8名）　博物館見学
2月14日	タイ・ラジャパンガラ工科大学ご一行（9名） 博物館見学
2月21日	韓国・忠南大学校ご一行（6名）　博物館見学
2月24日	駐日デンマーク王国大使ご一行（3名） モデルバーン見学
3月4日	2022年度卒論ポスター発表会（～3/5）
3月4日	4Dシアター『陰陽師が見たかも知れない星ぼし』開催
3月7日	JAXAご一行（15名）　博物館見学
3月7日	茨城大学ご一行（4名）　博物館見学
3月10日	三井業際研究所ご一行（22名）　博物館見学
3月15日	文部科学省高等局専門教育課木谷課長補佐 博物館見学
3月17日	文部科学省ご一行（7名）　博物館見学
3月31日	小澤丈夫館長　退任
3月31日	研究支援推進員　渡邉洋子さん　退職

入館者数（令和4年10月～令和5年3月）

	入館者数	見学団体数	解説の件数	企画展示（略称）
10月	24,133	休止	休止	第3回「建築の学生展」(10/8) 4Dシアター「人に話したくなる宇宙の旅」開催（10/22）
11月	17,815	休止	休止	Dシアター「人に話したくなる宇宙の旅」開催（11/5） 「小さなちいさな哺乳類 トガリネズミ展 －骨まで見せます！－」開催（11/29～12/25）
12月	10,478	休止	休止	「小さなちいさな哺乳類　トガリネズミ展 －骨まで見せます！－」開催（～12/25）
1月	8,371	休止	休止	
2月	11,037	休止	休止	
3月	14,650	休止	休止	4Dシアター『陰陽師が見たかも知れない星ぼし』開催（3/4） 2022年度卒論ポスター発表会（3/4～3/5）

お礼

以下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備等でご協力いただきました。謹んでお礼申し上げます。(令和4年10月1日～令和5年3月31日)(敬称略)

(敬称略)

◉植物標本
石川浩晃, 蝦名順子, 大原和広, 加藤 恵, 加藤康子, 菊地敦司, 木立真凜, 木下愛子, 児玉 諭, 坂上美裕己, 嶋崎太郎, 須田 節, 田端邦子, 中川博之, 中里清孝, 新田紀敏, 西村南美, 林 裕子, 藤田 玲, 星野フサ, 本多丘人, 桝山海里, 道川富美子, 目黒嘉子, 矢野ひろ, 山本ひとみ, 横山 耕, 吉中弘介, 吉村遥香

◉菌類標本
石田多香子, 鈴木順子, 谷岡みどり, 外山知子, 星野フサ, 村上さつき

◉昆虫標本
青山慎一, 梅田邦子, 柏崎 昭, 片倉晴雄, 川田光政, 喜多尾利枝子, 黒田 哲, 小杉真弘, 斉藤光信, 櫻井正俊, 佐藤國男, 澤田昌恭, 志津木眞理子, 諏訪正明, 髙橋かなみ, 高橋誠一, 問田高宏, 永山 修, 廣瀬朋輝, 藤田淳一, 古田未央, 細川真里栄, 村上麻季, 毛利 顕, 山本文子, 山本そら, 山本ひとみ, LIEW HAI XIANG

◉考古学
荒井綺乃, 荒谷 博, 池田圭吾, 今井菜摘, 内田耕平, 太田 晶, 大泰司紀之, 大藪隼平, 奥山杏南, 勝島日向子, 川森日向, 木村則子, 許 開軒, 工藤智美, 越崎聖也, 斉藤理恵子, 佐々木征一, 佐藤亜希子, 佐藤桐子, 謝 倩氷, 白石 稜, 髙橋由羽, 陳 姿螢, 坪内 和, 土肥加奈子, 西山 貢, 二瓶寿信, 丹羽志萌, 原山法大, 平山 薫, 堀 隼輔, 前田大智, 三ツ橋薫, 森本智郎, 安井優実, 山下真紀, 山田唯月, 吉沼利晃

◉メディア
鈴木陽彦, 矢野ひろ, 山田大隆, 山本ひとみ

◉化石
朝見寿恵, 荒山和子, 石崎幹男, 市橋晃弥, 糸井容子, 臼田みゆき, 大島康生, 太田 晶, 太田久美子, 大村 颯, 大藪隼平, 岡野忠雄, 尾崎美雪, 尾上洋子, 金内寿美, 木村聖子, 木村映陽, 小林将貴, 近藤知子, 酒井 実, 佐藤健一, 高崎竜司, 武田満希, 千葉謙太郎, 寺田美矢子, 長瀬のぞみ, 新井田清信, 比嘉大洋, 本村美奈子, 前田大智, 山角美夏, 山下暁子

◉北大の歴史展示
髙橋道子, 藤田正一

◉展示解説
在田一則, 池田玲菜, 太田 晶, 生越昭裕, 角井美月, 河本恵子, 笹谷幸恵, 千葉謙太郎, 塚田則生, トン タイン ミン, 永岡明美, 西川笙子, 橋本彩加, 廣瀬由香里, 松田義章, 村上龍子, 山崎敏晴, 山田大隆, 渡部典子

◉平成遠友夜学校
柿本恵美, 城下洽子, 須田 力, 田中敏夫, 藤田正一, 牧野小枝子, 増田文子, 山岸博子

◉4Dシアター
安部布実子, 石神早希, 岩本歩夢, 長田幸子, 加藤啓子, 清水花梨, 小路谷伽奈, 竹中玉絵, 田中裕子, 成川航斗, 長谷川健太, 平井由実果, 平田栄夫, 福澄孝博, 増田文子

◉ポプラチェンバロ
石川惠子, 石川弘晃, 小野敏史, 新林俊哉, 髙橋捺津, 新妻美紀, 野村さおり, 葉山朝世, 松田祥子

◉図書
岡西滋子, 今野成捷, 須藤和子, 髙木和恵, 田端邦子, 中井稚佳子, 久末進一, 鮒田久意, 本名百合子, 村上龍子, 森 秀代, 山田大隆

◉第2農場
石田多香子, 稲場良雄, 宇井康子, 大沼良文, 岡川秀幸, 金子哲郎, 西東 淳, 城下洽子, 橋爪俊明, 花里 隆, 藤井利侑, 山田大隆, 渡部典子

◉ハンズオン
嶋野月江, 須藤和子, 種市晟子, 仲谷優輝, 花岡瞳, 濱市宗一, 福澄孝博, 山岸博子

◉きたみてガーデン
青木太志, 新出純平, 石川弘晃, 浦里拓人, 加藤義典, 亀井里和, 川邉 航, 黒沢邦彦, 坂井佑衣, 佐藤 瞭, 新免友基, 玉田聖司, 陳 一惠, 西海航生

◉地学
安部布実子, 在田一則, 岩本歩夢, 金沢 瞳, 黒沢邦彦, 小磯直也, 佐藤淳子, 佐藤 豪, 清水花梨, 辻野淳子, 成川航斗, 新井田清信, 廣瀬由香里, 福澄孝博, 間口久美子, 増田文子, 山崎敏晴

◉水産科学館
網中結仁, Lee Jungho, 井黒浩輔, 小幡光汰, 園山萌香, 張 逸帆, 飛田祥太, 中條希美, 濵田幸穂, 檜垣健介, 樋口淳也, 古庄 誠, 松田悟史, 松本 堅, 山梨颯太

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM
北海道大学総合博物館

北海道大学総合博物館ニュース 第46号
編　集: 阿部剛史・山田久恵
発行日: 2023年(令和5年)7月12日
発行者: 坪田敏男

発行所: 北海道大学総合博物館
所在地: 060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
E-mail: museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp
http://www.museum.hokudai.ac.jp/

デザイン・印刷
畠山尚デザイン制作室